

京都地方 労働者教育史

発刊のことば

京都労働者学園が創立されたのは、一九五七年三月三〇日でしたが、その二〇周年の記念事業として、ここに『京都地方労働者教育史』をみなさまのお手許にお届けできましたことを、この上もなく欣快に存じております。

同書の執筆に精根を傾けていた元学園専務理事・石田良三郎氏、監修の労をわざらわせました京都大学・渡部徹教授、その他多くの関係者の方々に、学園として心からの敬意と謝意を表したいと思います。

ご一読いただければおわかりのように、労働者教育運動にひたむきの情熱とエネルギーを注いでこられた石田氏の、客観的な叙述の行間になお溢れ出ている、運動が躍進しているときのよろこびと、停滞したときの口惜しさを、わたくしたちは痛いほどに感じ取ることができるようと思われます。

そして、労働者教育運動のために、戦前から今日にいたるまで、いいしれぬ数多くの困難とたたかい克服の努力を重ねてこられた先達のみなさん方のご労苦に深い感動を覚えずにはいられません。
戦前篇は、主として渡部徹編著『京都地方労働運動史』に依つて記述されたそうですが（「はしがき」参照）、ここには、第一次世界大戦後の恐慌の嵐が吹きすさぶ中で、一九一〇年に「本格的な労働者

教育運動の夜明けの年」を迎える京都がその先駆的な役割を果したことが記されています（五四頁以下）。そして、山本宣治を初代校長とする京都労働学校は一九二四年四月から二六年春まで開講されましたが、この間、特高警察が、組合運動や労働学校をスパイするために、会場の隣家の天井をつつぬけにして見張っていました（一〇六頁）。治安維持法が一九二五年春に制定されたことは周知のとおりです。その後、労働者教育活動は一九三三年まで続けられましたが、常設の労働者教育機関としては、一九三一年一月に開設された京都労働学校が最後だった、と述べられています。この年、「満州事変」が惹き起されました。狂奔する戦争の激流が、労働者の勉学する権利を押し流してしまったのです。

戦後篇は、敗戦による廢墟と飢餓と異民族による占領政策の苦難の中で、四六年初頭には早くも京都民主戦線が結成され、同年三月には京都人文学園が開校されました。「青年たちは真理に飢えていたが、同時に飢餓に胃をさいなまれていた……腹が減るから登校しないで家でなるべく動かないようにして寝ていると連絡してきた生徒もあつた」と当時の生々しい状況の一端も記されています（二二八頁）。四七年五月には、労働団体代表・地労委代表・学識経験者からなる労働者教育委員会が設けられて、七月に京都労働学校が設立され、戦後、日本で最初の労働組合による労働大学として全国的に注目されました（二五六頁）。けれども、その後、米ソ両陣営の対立が急速に激化する中で、かつてマッカーサーによって「東洋のイスラム」された日本が「反共の防壁」として位置づけられるところ

もに四八年七月には、政令二〇一号によつて公務員等の争議行為が禁止され、同年九月の日経連第一回全国大会は、「赤旗をふみにじつて進め」と経営者を叱咤しました（二八八頁）。この年九月の京都労働学校入学者は前期の四割以下（一〇九名）に激減して、開校以来の最低を記録し、同年一二月、ついに閉鎖の止むなきに至りました。ですけれども、この間、同年一〇月に、労働学校校友会に結集した卒業生諸君が、「労働者教育は労働者の手で」、をスローガンに、京都夜間労働講座を週二回、授業料一五〇円で自主的に開設して応募者が約三〇〇人も殺到した、という経験は、労働者教育の方に関連して、貴重な歴史的教訓を提起しているように思われます（二九一頁）。

こうして、占領政策の大転換の中であらたな苦難に直面した労働者教育運動は、さらに企業整備や行政整理の追い討ちにあい、レット・ページ、朝鮮戦争への突入などの歴史の激動の中で、京都の組合の数も四九年の八五八から五〇年の五七九に、組合員数も一五万から一一・六万人に減少しました。そして、板門店での終戦、サンフランシスコ講和会議を経て、五三年一〇月には京都労働者教育協会が設立され、労働者教育運動はその後三年間にわたつて活発な活動が展開され、機関誌『ともしひ』が発刊されるまでにいたりました（三五七頁以下）。その後、京都の労働者教育を一層発展させるために、人文学園と京都労働協との合併・統一が協議され、当事者の大変なご苦労を経て、京都労働者学園が五七年春に設立されました（三九七頁）。

本書の叙述は、この労働者学園の誕生をもつて筆がおかれていますが、その後二〇年以上を経過し

た今日、ときに浮き沈みはあつたとしても、京都の労働者教育運動が、数えきれぬほどの多くの関係者のたゆみない努力によつていまに引きつがれているという歴史の重みを痛感せんにはいられません。

労働者教育運動は、石油危機以後またあらたな困難に当面しています。世界の歴史が大きく転換しようとしている現在、労働者教育の重要性はますます強まっていきます。わたしたちも、本書の中から多くの教訓を学びとつて、京都の労働者教育運動をさらに前進させるために努力したいと思います。関係者各位のご指導・ご鞭撻を心からお願い申しあげます。

一九七九年二月

社団法人 京都労働者学園
学園長 小林幸男

刊行によせて

——積極的活用を期待する——

渡部徹

一九七三年の石油ショックを機に、わが国の経済がそれまでの高成長時代から低成長時代に転換を余儀なくされたに伴い、改めて労働組合運動の在り方が根本的に見直さなければならなくなり、運動の再構築が焦眉の急となつていて。しかし現実は、労働組合運動の在り方をめぐって、また組合戦線の統一をめぐって、さまざまな見解が入り乱れ、容易に混迷から脱しえないでいることは、まことに残念である。

これを打開するためには、たしかなナショナルセンターのレベルや単産・単組レベルの幹部の合意を一日も早く達成することが望まれるが、大衆運動である以上は、その基底の組合員大衆の動向こそが打開の鍵を握るといえよう。そこに労働者教育・組合員教育が果たさなければならない大きな役割がある。

しかし、労働者教育はいかにあるべきか、については勤労者学園二〇年余の経過の中でも何度か議

論されてきたが、残念ながら、まだ完全な意見の一一致をみたとはいがたい。また、課せられた大きな課題に対し、果したところも満足できる状態ではない。関係者の今後の一層の努力にまつところ大といわなければならない。

この「京都地方労働者教育史」は、必ずしも、このような問題意識から編さんに着手されたものではないが、運動や労働者教育の再構築が急務となっている今日、改めて労働者教育史を仔細に追究したことは、期せずして、この要請にこたえる一助ともなりえていることを喜ぶものである。

また、これまで、全国的にも地方的にも、労働者教育史が系統的にまとめられたことがないだけに遅まきながらも、本書は全国のさきがけをなすものであり、各方面に大きな刺激を与えるにちがいない。

改めていうまでもないが、本書のように一九一〇年代から一九五七年の勤労者学園創立までの長い時期にわたる歴史編さんは、何よりも史料収集の上できわめて大きな困難が伴う。私自身、今にして思えば、戦前の京都地方労働運動史を編さんした当時、もし労働者教育史を念頭においておれば、今は物故された方々からの聞き書きなどでもっと充実した史料が残せ、今度のお役に立てたものと悔まれるのである。また戦後当初の時期は新聞のページ数も今日とくらべればきわめて少なく、ローカルニュースの掲載は限られ、史料としてはほとんど利用できず、多くの組合も当時の史料を保存しているのはきわめて稀という状況であるから、執筆された石田良三郎さんの御苦労は大変なものである。

よくぞここまで調べられたと、敬服にたえない。この機会に、組合などに今後、史料保存のために一段の配慮をお願いすると同時に京都府・京都市など公的機関が現代史資料の収集・保存に積極的に取り組んでいただきことを切に期待したい。

最後に、経済的に困難な、この労働者教育史編さんを企画・刊行された京都勤労者学園に深い敬意を表するものである。

一九七九年二月

は
し
が
き

社団法人京都労働者学園は、一九七七（昭和五十二）年三月二十四日の第二十一回園員総会において、創立二十周年記念事業の一つとして、戦前から一九五七（昭和三十二）年学園創立前後のころまでの、京都地方の労働者教育活動に関する調査と、その出版を議決し、京都大学の渡部徹教授と、元学園専務理事 石田良三郎にその編さんを依嘱した。

この依嘱にもとづいて、石田は諸資料を収集整理の結果、戦前に属するものを第一部、戦後のそれを第二部として執筆し、ここに公刊する運びとなつた。

戦前の京都地方労働運動史に関しては、周知のとおり、一九五九（昭和三十四）年十二月、同運動史編纂会発行の、渡部徹教授編著にかかる、同表題の著作（以下「運動史」と略称する）がある。一五八六ページに上るこの膨大な著書には、京都の労働者教育のなりたちと、その変遷についても、当然とりあげるべき課題として随所にこれを伝えている。従つて読者はこの著述を通じて、戦前の労働者教育発展のあとを余すところなく知ることができるであろう。労働組合運動そのものが、労働者教育であるという観点からすれば、この膨大な著書の通読が望ましいが、いわゆる労働者教育活動に焦点をしぼって、その発展と消長のあとをたどろうとする場合、この「運動史」はあまりにも膨大であ

り、読者にとつて、過大の負担となる場合なしとしない。

「京都地方労働者教育史」第一部（戦前）を記述するにあたつて私は、渡部徹教授の許しを得て、「運動史」の中から、労働者教育にかかわりのある部分を抜き出した上、適宜配列し、それに他の文献、たとえば元国會議員谷口善太郎氏（故人）が雑誌“ともしび”に寄稿した「戦前の労働学校の思い出」その他の既存資料を引用付加し、また戦前の労働学校に直接関係した数人の経験者の話を参考にして、これをまとめあげた。従つて第一部（戦前）に関してはその内容には特に目新しいものはないことを、あらかじめお断りしておきたい。

戦前の部は上述のように、すぐれた参考文献に恵まれたが、第二部（戦後）に関しては、京都社会労働問題研究所長宮田栄次郎氏が一九七三（昭和四十八）年五月以降、同研究所報「社労研」に連載中の「京都労働運動物語」や、京都府労働經濟研究所編さんの「京都労働運動史年表」、「総評京都地評運動史」、「島津労働組合三十年史」、京都合同織維労組の「二十年の歩み」、「京都市職労二十年史」その他の資料はあるが、労働者教育に関する記述は極めて少い。僅かに私が一九四九（昭和二十四）年京都市労働課長の職にあつたとき編さん刊行した「京都労働年鑑」、同じく私が一九七一（昭和四十六）年一月から五月にかけて、「京都勤労者学園報」に五回にわたり連載した「戦後京都の勤労者教育」と、一九五五（昭和三十）年九月、京都労働月報No.94所載の、京都府労政課の「京都府下における労働者教育の現状」などが、その状況の一端を伝えているにすぎない。

ただ一つ、私がこの戦後史執筆のさ中の、一九七八（昭和五十三）年五月、神戸女子薬科大学講師上野輝将氏が、同大学の「人文研究別冊第五号」に「戦後京都における文化運動と知識人」を発表され、その中で「京都人文学園」と戦後初期の京都の労働者教育、「京都労働学校」を中心に、克明に分析し、的確に記述された。この著述は、京都大学文学部助教授松尾尊允氏が、同大学文学部研究紀要18に発表された「敗戦直後の京都民主戦線」と題する論文とならん、ともに戦後初期の京都の民主化運動の状況を明らかにした貴重な文献といえる。しかしこれらの著作はいずれも概ね一九五〇（昭和二十五）年ごろまでの記述にとどまり、一九五七（昭和三十二）年までにおよぶものはない。

そういう文献がないからこそ、労働者学園は、この教育史の編さんを企図したのであろうが、私はその依頼をうけた際、私自身が直接のかかわりをもつた戦後初期の「京都労働学校」を中心とする教育についての記述だけを引受ける心つもりで、学園当局にもそのように返答したのであったが、意外にも、全部を私一人で執筆せねばならぬはめになってしまった。

いまさら愚痴をいってもはじまらないが、これは齢すでに七十五歳を越えた私には、あまりにも重荷であった。私は嶮しい山道を登るように、喘ぎ喘ぎ資料の収集にあたった。できれば既存資料を集めるだけでなく、丹念に単産や単組を歴訪して、資料を掘り起したかったのであるが、その気力はなく、わずかに京都府労働経済研究所や、京都府総合資料館に足を運ぶくらいが関の山であった。「京都府労研」では、幸い岡田敏男所長のご高配と、所員柴田貞正氏の格別のご厚意により、貴重な諸資

料の閲覧を許していただいた。しかしその中にも労働者教育の資料は数少なかった。特に戦後京都の労働者教育の上に一つの重要な役割を担つた京都府労働部関係の資料が稀少で、ためにその実態を的確に解明し得なかつたことは、甚だ残念であった。また単産、単組の活動に就ての記述が極めて不充分となつたことと、戦後の他都市の状況を参照できなかつたことは、私の力量が及ばなかつた結果である。他日、関心をもつ人々によつてこれらの点が埋められ、誤りが正されることを期待したい。

私はこの原稿を、京都大学教授渡部徹先生と、京都社会労働問題研究所所長宮田栄次郎氏、及び京都労働者学園専務理事青柳和愛氏に読んでいただき、誤りを正していただいた。こうして一応、三氏の監修を経たものではあるが、この著述の構成、内容、文章の一切は、筆者の責任にかかるものであることはいうまでもない。ご多用中特に時間をさいて、この大部の原稿を読了し、加筆していただき渡部、宮田、青柳三氏に、厚く感謝の意を表したい。また第一部（戦前）の執筆にあたり、大正期の京都労働学校に学生として参加された広井喜代造氏および、昭和初期の総同盟の労働学校の経営に参画された吉田文治、国島泰次郎両氏から経験談を拝聴できたことは幸せであった。また第二部（戦後）については元京都府労働部長井家上専氏および元同労政課員吉川博明氏から府労働部の労働者教育についての話を、また元京都労働者教育協会職員高橋和子（旧姓田辺）氏と田口喜久江（旧姓錦織）氏から同協会の活動状況を伺うことができた。立命館常務理事西村幸雄氏、「京都民統の思い出」の著者小柳津恒氏および京都労働者学園事務長杉本喜代巳氏らからはそれぞれ参考資料の提供を受けた。

「京都府労研」の柴田貞正氏の一方ならぬご配慮を賜つたこととあわせてここに深く感謝の意を表したい。

一九七九（昭和五十四）年二月

石田 良三郎

序 文

目 次

発刊のことば
刊行によせて
はしがき

第一部 戦 前 篇

(一) 啓蒙の時代

1 わが国労働組合運動の発端	25
(労働組合期成会……25)	(友愛会……28)
2 友愛会舞鶴支部の創立と啓蒙運動	31
3 友愛会京都支部の成立と啓蒙活動	33
4 「民衆の中へ」	40
5 友愛会京都支部の躍進と衰退	47

社団法人京都勤労者学園学園長 小林幸男

京都大学教授 渡部徹

(二) 労働者教育運動の黎明期

1 京都労働学校の青写真

2 京都赤旗事件

3 西陣織物労働組合の労働者教育

4 総同盟の左翼化

(三) 労働者教育運動の勃興期

1 労働者教育運動の進展

2 総同盟京都連合会の発展

3 「京都労働学校」の創立

4 他都市における労働学校の発展

5 「労働教育会」—（有島財団）のこと

6 総同盟の分裂と評議会の成立

7 評議会の労働者教育方針

8 「京都労働学校」と学生社会科学研究会

9 京都無産者教育協会の設立

10 無産者教育運動の進展

(四) 労働者教育運動の後退

- 1 治安維持法と「京都労働学校」の閉鎖
- 2 無産政黨の誕生
- 3 社会民衆党・総同盟の労働者教育
- 4 四分五裂の無産政党
- 5 労働組合全国同盟の労働学校
- 6 鐘紡争議と総同盟の躍進
- 7 総同盟京都連合会の教育活動方針と労働学校の再建
- 8 京都労働組合総評議会の結成と解体
- 9 全国労働組合同盟京都連合会の教育活動
- 10 満州事変前後の無産政党と労働組合
- 11 総同盟と全労
- 12 全評と全總
- 13 労働学校の衰退とその原因

(五) 労働組合の崩壊

- 1 戰争と労働運動の後退

2	戦時下総同盟の労働者教育運動
3	労働組合の崩壊
4	京都市社会課の勤労者教育
5	軍国日本の壊滅
	参考文献

第二部 戦後篇

(一)

敗戦と民主化

(A)	敗戦……181	(B) 占領軍の民主化政策……182
(C)	革新政党、労働組合、民主団体の誕生……183	
(社会党……184)	(総同盟……185)	(共産党……187)
(京都地方の革新政党、労働組合、文化団体の誕生と初期啓蒙活動		(自由懇話会……187)
(A)	民主的諸団体の誕生……188	
(社会党……189)	(共産党……190)	(労働組合……191)
(京都自由人協会と近代市民講座……192)		

188 188 181 174 168 165 163 161

(京都人民解放連盟と京都人民学校…… 193)

(青年社会連盟…… 194)

(京都勤労婦人連盟…… 195)

日本労働組合総同盟京都連合会の創立

民主主義科学者協会京都支部の創立

京都民主戦線の結成

革新政党による啓蒙活動

(社会党の講座…… 205)

(共産党の党学校…… 206)

(京都人民解放連盟の講座)…… 207

労働運動、大衆運動の昂揚

総同盟京都府連の移動労働講座

総同盟舞鶴地方労働組合協議会の設立と舞鶴労働学校開設設計画

その他労働組合、民主団体などの教育活動

京都金属労働組合連合会の結成

(三) 京都人文学園の創立

京都産業労働調査所

(四) 京都労働団体の確立

京都産業労働調査所

(A) 二大労働団体の成立と闘争

(総同盟…… 235) (産別会議…… 235)

(十月闘争からニ・ーストへ…… 237)

(B) 二・一スト前後の京都の状況

(C) 京都地方労働組合協議会の結成

(D) 京都労働学校の創設と労働者教育運動の発展

(A) 京都労働学校の開設…… 247 (B) 舞鶴地方民主主義講座…… 257

(C) 日本共産党舞

鶴地区委員会、アカハタ舞鶴支局主催の労働講座…… 259

(D) 京都勤労婦人連盟の労働

学校…… 261 (E) 組合その他の労働講座…… 263

(単組の講演会…… 264)

(F) (G) (H)

問題講座…… 264 (昭和二十二年度第一回総同盟夏期労働大学講座…… 265) (立命館の

土曜講座…… 266) (京都府管内の労働教育・啓蒙活動の概況…… 267)

(F) 京都労働学校第二期…… 268 (G) 京都市労働課の新設…… 270 (H) 京都労働学校第

三、第四期…… 274 (I) 京都労働学校第五期…… 278 (J) 移動労働講座…… 278

(K) 京都労働学校校友会…… 280 (L) 夏期夜間労働講座…… 282 (M) 政令二〇一号…… 284

(N) 民主主義文化連盟京都府協議会の短期労働講座…… 288 (O) その他の講座…… 289

(P) 京都労働学校第六期と京都夜間労働講座…… 290 (Q) 中小企業夜間移動労働講座…… 293

(R) 京都労働学校の閉鎖 : 296

(S) 京都夜間労働講座第二期 : 300

(T) 社団法人京

都労働学校設立の計画と挫折 : 301

(七) 京都人文学園夜間部

(八) 占領政策の変化と労働組合

(A) G・H・Qによる労働者教育 : 314

(C) 京都における労働組合の状況 : 321

(D) 一九五〇（昭和二十五）年以降一九五六

（昭和三十一）年までの諸状況 : 325

(九) 京都府労働部の教育活動

(十) 京都府労働部の教育活動（つづき）

① 労政事務所などによる労働教育 : 344

② 一九五二（昭和二十七）年京都府夏季

労働大学 : 346

③ 京都労政事務所主催 昭和二十七年第一期労働講座 : 347

④ 舞鶴労働実務講座 : 349

⑤ 府労働部の一九五三（昭和二十八）年夏季労働講座

350

(十一) 一九五〇（昭和二十五）年—一九五三（昭和二十八）年の民間団体による講座

(十二) 京都労働者教育協会

① 京都労働者教育協会創設の経過 : 357

② 第一回府立労研講座 : 362

356 352

344 337

314 307

(3) 勤労協と京都府共催の一九五四（昭和二十九）年夏季労働講座………364

(4) 一九五四（昭和二十九）年夏季労働大学………367 (5) 一九五四（昭和二十九）年十

一月講座………370 (6) 一九五五（昭和三十）年春季労働学校………371 (7) 同夏季婦人学

校………374 (8) 同秋季労働学校………375 (9) 組合主催などの労働講座………377 (10) 合同織

維………377 (府職………378) (立命館………378) (府労政課………379) (日本電池………379)

(市、区職………379) (舞鶴地労協………380) (京都地評………380) (奥丹後………380)

(10) 勤労協の一九五六（昭和三十一）年春季労働学校………381 (11) 同夏期労働学校………382

(12) 同秋季労働学校………383 (13) 勤労協の研究サークル活動………384 (14) 同機関紙「と

もしび」の発刊………386 (15) 同講師斡旋………388 (16) 同學習サークルへの援助………393

(17) 勤労協の展望と財政………395

(4) 人文学園と京都勤労協の統一と京都勤労者学園の創立

参考文献

あとがき

京都勤労者学園専務理事 青柳和愛

